

49. データー処理システムの導入による myeloscintigraphy の経験

聖マリアンナ医科大学 整形外科

吉崎 賢一 三好 邦達

放射線部

石川 大二 榊 徳市

Myelopathy や radiculopathy を呈する種々の疾患に対する診断法として myelography が大きな位置を占めることはいうまでもない。近年、水溶性造影剤の出現により下部腰椎部の myelography は比較的容易に行われつつあるが、それでも、術後の安静や、side-action の発現等患者の苦痛にはかなりのものがある。また下部腰椎部よりも中枢側に病変の考えられるものについては、いまだに、往來のように、油性造影剤による Myelography が行われているが、これには衆知のようにかなりの side-action が存在するため、我々の教室では、手術を前提とする症例に限って施行している現状である。

一方、Isotope を用いた myeloscintigraphy は排泄が速やかで、side-action が非常に少なく、造影剤を移動させるため体を傾けることも、検査後特別の安静をとる必要もない等多くの利点を有しながら、現在、なお広く利用されるに至っていない。その理由として、設備という点をあげることもできるが myeloscintigram が造影剤による myelogram に比し鮮明さに欠け、その解読が困難である点も大きな原因がある。

今回、我々は、 ^{169}Yb 、 ^{111}In を用い、頸性脊髄症、脊椎管狭窄症、腰椎椎間板ヘルニア、脊髄腫瘍に対し myeloscintigraphy を行い、得られた情報をデーター処理システムにより解析し、より定量的、客観的 myeloscintigram を得ることができたので、解読可能な大きさに関する実験結果、脊髄腔内における Isotope の広がり方に対する考察を加え報告する。